の調査研究に從つてゐられる人である。

收めるところは一、支那農村の片影　二、魯省（山東省）觀感——膠濟鐵路の旅　三、魯省隨想——津浦鐵路の旅　四、江南無錫榮巷鎭）の桑園地帶を視る　五、蘇州の小作制度　六、農村實驗錄　七、支那農村調査覺書　八、吉林省懷德縣大泉眼農村調査報告　九、支那の經濟雜誌　の九章であり、これらを地域的にみれば、中支江南地方から北支・滿洲國へと亙つてゐるが、中でも第四章と第七章・第八章は、もつとも興味深く、第五章も小篇ながら蘇州地方の小作制度が、はつきりと描かれてゐる。

この書は裸記と題するやうに、著者自身による支那農村の實態調査に關する覺書を集められてあるにすぎなく、それぞれの詳細なる調査報告書は別に刊行されるであらうが——現にその一部は滿鐵調査部より出てゐる——それでも、その一つ一つが大なる資料的價値を有してをり、それによつて啓蒙され、暗示される點が幾許か知れない。それに文章の平易さは、一般の支那に關心を有する人人にも、充分な滿足を與へるであらう。

一體支那は文字の國といはれ、或は文書の多いことを汗牛充棟などと誇るやうに、その歷史の研究にあたつても、文獻的資料の厖大さ、饒多さには、時として腹立しさをさへ感じるほどである。その上、肝腎なところになると、それらの全てが一樣に默してしまうことが多く、稀に考古學的遺物によつて、わづかにその幾分かゞ補はれる場合もあるといふ有樣である。しかし、支那のやうに變化の少い、發展度の低い社會にあつては、現在における社會各方面の實態調査といふものが、これら歷史的文獻や古資料に劣らず高く評價さるべきものであり、かかる實態調査の成果こそ、今後歷史の研究に從事するものとしても、決して忽せにするをえないことを、われわれは本書によつて切實に感ぜさせられるであらう。

と同時に、一口に實態調査といつても、これを遂行するには、なみなみならぬ困難と勞苦、それに加へるに如何に多くの人たちの協力や、長い歲月に亙る根氣强さを必要とするかをも本書は、はつきりと敎へてゐる。（生活社刊、定價參圓）（田村實造）

國家と宗敎

南原　繁著

國家の問題は、現在の我々にとつて最も大きな關心事の一つであり、しかもこれを單なる法的政治的立場からでなくして人間の內的生命との深い聯關において把へる事によつて、初めて我々は、國家本質の眞の理解と國家生活の誤りない創造とに到達し得るのであるが、本書において南原敎授が「凡そ國家の問題は根本において全文化と內的統一を有する世界觀の問題であり、隨つて、究極において宗敎的神性の問題と關係なくしては理解し得られぬ」との確信を持つて、國家と宗敎との內面的聯關性の在り方を、古代ギリシヤから現代ナチスに到る迄深い理解を以て辿り來り、其の史的展開の中から、現代世界における國家の進路に其の向ふ可き方向を與へんとせられるのは、稍もすれば國家における

自然的權力性の一面のみが強調されんとする際、其の示唆する所誠に尠しとせぬ。

本書は、(一)プラトン復興。(二)キリスト教の「神の國」とプラトンの理想國家。(三)カントに於ける世界秩序の理念。(四)ナチス世界觀と宗教。の四章より成る。教授は先づゲオルゲ學派の非合理主義的政治中心的新プラトン像を取り上げ、プラトンの國家思想がその中に深い宗教性を包攝しながら、結局人間の自己實現の爲の文化主義的原理に立つ事を指摘され、これに對し、宗教的神の國を政治的國家より超出せしめる事により反つて國家に對し全く新しい意義と課題とを與へたキリスト教の重要性を強調される。其の後における國家の內的宗教的基礎づけにとつては、プラトン的理念とキリスト教的理念との綜合が根本課題であり、此の解決を、政治的國土を神の國との關係において人類永遠の理性的課題、歷史の理念に迄高める事により達した人がカントに外ならぬ。そして、十九世紀後半支配的になつた自然主義的唯物論的自由主義の無宗教性に對する生の救濟として登場したナチスと其の世界觀が、其の極端な民族主義の爲反つて理想主義的使命を失ひ、ナチスの强調する「血」の宗教、「種」の宗教が單なる無宗教に終る危險のある事を述べられ、結論として、「カントの據ゑそしてヘーゲルが却つて撤し去つた所の『批判主義』の思惟の限界」に留まる可きであり、「文化と政治とはそれぞれ固有の價値を保持しつゝ相互に協力奉仕」せねばならず、しかもその際の統一の可能性は政治にでなく「宗教的理念に求められねばならぬ」と飽くまで人間內面性の自律を尊重されつゝ、「國家がかゝる自由の宗教的信仰に裏づけられて初めて鞏固な世界觀的根據を獲得」するであらうと說かれる。

我々は、國家の正しい在り方を宗教的絕對性との結合に求められる教授が、何處までも人間の魂の自主性を尊重される點に深い敬意を拂ふと共に、本書の中に、人間の外的秩序と內的生命との離ち難い相互聯關を史的に繰りひろげたすぐれたヨーロッパ精神史を見出す事に大きい喜びを感ずるものである。(岩波書店刊、定價參圓五拾錢)(兼岩正夫)

イギリス帝國主義史論　矢口孝次郎著

本書が最も時局的な、從つて時流に棹した際物であるから紹介せんとするのではない。現今のやうに生活地盤の移り行く速さの餘りにも早く、爲めに戰爭と一應直線的には、關はりなき文化科學研究の學徒が時には、自分等の爲す所果してどの程度迄、國家に奉仕し居るやの愁なきにしも非ずである。が然し自己の專攻の領域について着實に研究し、時到れば國家の向ふ所に關し、その研究の成果を公にする事が、結局最も直接的に國に奉ずる事になる所以を本書が敎へてゐるからに他ならないのである。

今次の大東亞戰爭が內にはヨーロッパ的近代文明の超克を、外には「世界史に於ける日本乃至大東亞の主體性の自覺と確立」をその課題とする事に關して何人も異論のない所であるが、然も著者と共に、此の「ヨーロッパ的近代は更に大觀すれば著しくアング